
僕を取り巻く女難の相

合衆国

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕を取り巻く女難の相

【Nコード】

N9896F

【作者名】

合衆国

【あらすじ】

水無月和鶴は、祖父が校長をしている中高一貫の水無月学園に入学する新入生。水無月学園には「普通科」「魔法科」「超能力科」があり、和鶴は平凡な人生を歩むため「普通科」に入ろうとするが、祖父の意地悪によって「魔法科」に入れられてしまう。和鶴が中学校で仲の良かった友人達も巻き込まれて「魔法科」へ。さらに祖父の言い放った、『あの一言』によって先輩（女）、友人（女）、友人（男）、そして実の妹という晴れやかなメンバーからの猛烈アピールを受ける和鶴に平和な日々は送れるのか――！？

第0話：プロローグ

——僕は立ち尽くしていた。
そして僕は思う。

なぜ、こんなことになったのかと。

なぜ、美少女が4人（といってもそこには男とは思えないほど可愛い男と、僕の妹も混じっている）が僕を獲物を見つけたときの獣の目をしながら僕を見ているのだろうか。

僕はテーブルなどが飛び交い、メチャクチャになってゆく自分の部屋を見ている。あつ、今飛んでったのは僕の貯金箱だ……

頭を抱えそうになるのを堪え……きれずに、頭を抱えながら事の発端を思い出してみる。

ああ……そうだ。このデンジャラスな状況は、あの、忌ま
忌ましき僕のお祖父ちゃんのあの一言からはじまったんだ

第0話：プロローグ（後書き）

小説を書くのは初めてなんで、おかしな所を見つけたら笑ってやっ
てください。そして、見なかったことにしてくださいね？（笑）

第1話：祖父の策略

言いたいことはたくさんあるけど、まずは自己紹介から始めようと思う。

僕こと水無月和鶴《みなづきかずや》はひとつ年下の妹を持つ、少しだけ勉強が苦手なだけの普通の人間だ。そんな僕は今日から高校生になるんだけど……

その日は朝起きたときからなにかいつもと違う感じがしていた。寝坊の常習犯の僕が寝坊をしなかったし、髪の毛はハネてなくてすでに整えた後かと思うほどだった。

だから少し浮かれていたのかもしれない。朝、僕が起きると枕もとに何かがあることに気が付いた。

「ふわぁ、よく寝た。ん？　なんだコレ？」

手に取ってよく観察してみる。するとそれは長くて、どこかで見たことのある色と形をしていた。

そう、その正体は――

「なんだ、ゴボウじゃないか。どうしてこんなものが僕の枕もとに？」

ゲームとかでよく見かける魔法の杖のように先端部分が折れ曲がっていたけど、そんなもの現実に存在するわけないからこれはゴボウで間違いないはずだ。

「そうだ！　このゴボウは今日の朝ご飯の味噌汁の具に使おう！！」
そうと決まれば急がなくなちゃ。味噌汁を作っていて遅刻した、なんて恥ずかしすぎる。

「さて、ゴボウ(?) もしっかり洗ったし、そろそろ切り始めるか」
包丁を用意してまな板にゴボウを乗せる。そのままでは少し長い

ので半分に切らなければならない。「よっ——あれ？　おかしいな、全然刃が入らないんだけど？」

念のため、もう一度やってみる。

グッ！！

「か、固っ！！　なにこのゴボウ！？　固っ！！」

くそっ、どんだけ固いんだよこのゴボウ！！

・・・・・・仕方ない、この前まな板を叩き割ってしまつて封印したあの技を使う必要があるそうだ・・・・・・！！

「くたばれえっ！！　この腐れゴボウがっ！！」　包丁が僕の頭の上から、ものすごいスピードでゴボウに向かって振り下ろされる。

ガギインッ！！

「なにいつ！？　この技でも無理なのか！？」

魂まで込めた一撃を軽々と跳ね返されてしまった。この技はカボチャですら真っ二つにしたというのに！！

「・・・・ふふ、ふふふふ・・・・・・。どうやら君は僕を怒らせてしまったようだね？」

これから憐れな姿になるゴボウに語りかける。「確か、このあたりにチェーンソーがあつたはず・・・・・・」

「おはよー・・・・・・」　ガサゴソと物置を漁っていると2階から妹の小夜《さよ》が眠そうに降りてきた。今日から中学生だというのにまだ着替えていないのか、うさぎがっぽいプリントされているかわいらしいピンクのパジャマを着ている。

背は僕より頭1.5個分小さく、胸はBカップだ。いや、別にお風呂に入っているところを覗いたから胸のサイズを知っているわけではない。この前、小夜本人が僕に胸のサイズを報告してきたのだ。胸のサイズを兄に報告してくる妹は正直だと思う。僕は鼻

血が止まらなくて、死にそうになったしね。

「ふに〜」

「ぐおっ!？」

小夜が、寝ぼけているのかしゃがんでる僕の首に後ろから腕をまわしてそのまま覆いかぶさるように抱き着いてきた。

「さ、小夜……?」「なに〜? お兄ちゃん」

僕に抱き着いてくるのは小夜のいつもの癖なんだけど、寝ぼけていることもあって今回ばかりはわけが違った。

だって、

「とりあえず離れてくれないかな? さっきからずっと、けい動脈が小夜の腕で絞まってとっつっても苦しいんだけど」

たっぷりと時間を置いて、小夜が口を開く。

「………むふふー、やっぱりお兄ちゃんは抱き心地が抜群にいいねえ」「えっ!?! けい動脈についてはスルー!?! しかもなんか抱き枕扱いされてる気がするの僕だけなの!?!」

ダ、ダメだ……!! だんだんと気が遠くなってきた!!

このままでは、入学式の当日に病欠なんて一生のトラウマになりかねない事態が起こってしまう。

それだけは避けねばならない。

まずはこの寝ぼけて実の兄を殺そうとしている妹をどうにかしないといと!!

「ホラ、早く起きて!!」 ペしペしと小夜の頬を叩く。

「はっ!! ……お兄ちゃん、おはよう。何してんの?」

死にかけてました。

自分が寝ぼけて何をしていたかは覚えてないみたいだ。

「いや、そのまな板の上の妙に固いゴボウごときが僕にことごとくたてつくものだから、ちょっと制裁をくわえてやろうかと思ってチエーンソーを探してたんだけどね?」

「制裁って……いくらなんでも、ゴボウ相手にチェーンソーはないでしょ。」

小夜が呆れた顔でまな板の上の物を見て——
そして見事に固まった。

「………？どうしたの小夜？」

「ああ、なるほど。お爺ちゃんか………」

「え？なにがお爺ちゃんだって？ このゴボウ？」

「そんな訳無いでしょ。もしかしたらお兄ちゃんってすんごいバカ？」

「うっ………、今の一言で僕の心は立ち直れないほどの大ダメージを受けた！！」

「はいはい。そんなことよりこの棒——」「ゴボウだっ！！」

「ちよっと黙ってて！！」

「スイマセン………」 訂正してあげたのに軽くたしなめられてしまった。

「で、この棒はゴボウなんかじゃないの」

「ええっ！？ ずっとゴボウだと思ってたのに！！」

「まず、見た目で気付こうよ！？ それに全然しないし！！」
そうか、その手があったか。

「じゃあ、このゴボ……棒は一体なんなのさ！？」

そう小夜に聞くと小夜はいたづらっぽく笑って、こう言った。

「それならお爺ちゃんに聞いた方が早いと思うよ？」

「ふーん。また後で聞いておくよ。どうせ、学校で会えるだろうから。じゃあ、そろそろご飯でも………ってそういえばゴボウがないから味噌汁が出来ないや。もう食パンでいいよね？小夜」

「うん、別にいいよ」

パンを食べ終わるのはいつも僕の方が早い。なので当然、家出るのも僕の方が早い。

「それじゃ、先に行ってるよ？行ってきたーす！！」「あ、うん。いってらっしゃい。」

そうしてそれだけ言うとは僕は玄関のドアを開けて、学校へと歩きだした。僕が通うことになる水無月《みなづき》学園は中高一貫で、小夜は中部、僕は高等部に入学するというわけだ。

水無月学園はその広大な敷地の中に四つの校舎があるのが特徴だ。ひとつは中部の校舎。ひとつは高等部、『普通科』の校舎。ここまではまだ一般的な風景だと思う。ただ、『普通科』というところを除外はだけど。

そして、あとふたつ。

ひとつは高等部、『魔法科』の校舎。
最後に高等部、『超能力科』の校舎。

校舎うんぬんの前になぜ、こんな学科が存在するのかというと、水無月学園の学園長でもある僕の祖父が昨今の学力低下の原因が集中力の足りなさストレスにあるとみて、それらを克服するために発明家でもある僕の友人の父親に相談を持ち掛けたところ、敷地の四隅に馬鹿でかい黒色の柱が立った。

なんでも、その柱からは特殊な磁場が発生しており、その中でのみ魔法や、超能力が使えるらしい。

魔法や超能力は使用者の感情と集中力で威力が変わるので、集中力の向上などにストレスが溜まらないという利点を含めて効果的なわけだ。

僕も中部から水無月学園に通っているから、噂はかねがね聞いていた。けど、僕は普通の学園生活を楽しみたいので無難に『普通科』を選んだ。

そんな考えを持つ奴の中には当然中部からの顔なじみも居る。そして、今僕の目の前にいる——いや、『倒れて』いると言った方が正しいだろう、真泉梨華《まいずみりか》も顔なじみのひとりだ。

「って、それどころじゃないじゃないか！！」

急いで駆け寄り彼女の額に手を当てる。

駆け寄る途中で一度転んでしまつて泣きそうになつたけど、それは今問題じゃないはずだ。

よし、僕は強い子だ。

「すごく熱い・・・！！これは40度ぐらいあるかもしれないね・・・」

予想以上の病態の悪さにどうしようかと悩んでいると、持っていたゴボウらしき物が蒼く光だした。

『まさか、使えって言ってるんじゃないよね？』

ゴボウごときに何が出来るというのだろう。

その言葉に反応するかのようにゴボウらしき物が、より強く輝きだした。

『そんなバカな・・・いや、試してみる価値はあるかもしれない！！！！』

僕は立ち上がりゴボウらしき物を高く掲げると、叫んだ。周りから見ればとてもシュールな光景に見えるかもしれないけど、今はそれどころじゃない。

「ゴボウよ！！どうか真泉さんを助けてあげてくれ！！」すると、ゴボウらしき物が今までとは比べ物にならないほど輝いて、辺り一面を蒼い光で埋めつくした。

光が止むと、さっきまで肩で息をしていた女の子は安らかな寝息を立てて眠っていた。

「良かった・・・。。助かったみたいだ。それにしてもこのゴボウらしき物は一体何なんだろうね？ やっぱゴボウ？」

校門で放っておくのは可哀相なので、真泉さんをおんぶしながら、職員室へと向かう。

真泉さんをこれからお世話になる先生方に預けると、僕はまっす

ぐ校長室を目指した。

このゴボウらしき物のことを聞いたためだ。

ガチャッ

僕はドアをノックすることなく、校長室へと入る。

「お爺ちゃん、このゴボウらしき物は何なの？」「ノックぐらいせんか。あと、学園ではお爺ちゃんと呼ぶなど言っただはずじゃぞ？学園長と呼べ」

「そんなことよりコレ、なに？」

ゴボウらしき物を差し出す僕。

「コレはゴボウなどではないわ、バカタレが。コレはな、れっきとした魔法の杖じゃ。入学祝いのプレゼントにくれてやるから感謝するのじゃぞ？」

バカって言われた気がするけどここは流す。

「え！？ やっぱコレってゴボウじゃなかったの！？」「…………どこからどう見てもゴボウには見えんじやろう、このバカタレが…………間違いない。確実にバカにされている。」

「酷いよ！ お爺ちゃんも小夜も僕のことをバカにして！！僕はそこまでバカじゃないよ！！」

「なら、中等部の頃の期末テストの数学の点数を言ってみるのじゃ……………6て——」

「バカタレ」

そんな！！ まだ言い終わってないのに！？ 「まさかそこまで悪かったとは……………」

「ち、違うよ！ 数学のテストの時はちょっと調子が悪くて……………」

「言い訳はせんでよい。ところで、先ほど蒼い光が見えたのじゃがあれはなんじゃ？」

蒼い光っていうと・・・ああ、真泉さんを助けた時のあれか。

「たぶん、これが魔法の杖だったんならそれは僕だよ。そうか、僕は魔法を使ったのか」

「む？　和鶴はさっき魔法を使ったのか？」

「うん、そうだと思うんだけど。」

そう僕が言っていると、お爺ちゃんがニヤニヤしながらこう言ってきた。

「そうかそうか、魔法を使ってしまったのか」

ん？使って『しまった』？

「ねえ、お爺ちゃん。使ってしまった、ってどういうことなの？」

「いやな、うちの学校では余程のことでない限り、魔法は使用禁止になっておって、それを破った者には厳しい罰が与えられる」

「ええっ！？　そんなの聞いてないよ！！」

「当たり前じゃ、言っておらんからな」

なら、今回は無効になるはず！！

「お爺ちゃん！！　僕はそのことを知らなかったんだから今回は無こ
——」

「というわけで、和鶴には希望していた普通科ではなく魔法科に編入してもらおうかの。」

全然人の話を聞いちゃいねえよ！！　この腐れジジイ！！

「なにいつ！？　さては最初からそれを狙っていたなこのクソジジイ
っ！！」

「何のことか、さっぱりわからんいう」

ちくしょう！！　この期に及んで、まだとぼけているつもりか！！

「まあ、そういうことだから３年間頑張るのじゃぞ。魔法科で！！」
最後の部分だけ妙に強く言われた気がするのは僕だけだろうか？
でも、一番気掛かりなことは——

「嫌だあああっ！！　顔なじみはみんな普通科にいるのに僕だけ魔法

科なんて嫌だああっ!!」

「ふむ、そこまで言うのならその顔なじみ達も魔法科に編入させてもよいぞ? 基本的な部分は普通科も魔法科も超能力科もほとんど同じじゃからな」

「え!?! いいの!?!」 「うむ。それぐらいは許してやろう」

「ありがとうお爺ちゃん!! お爺ちゃんのことクソジジイとか腐れジジイとか思ってたけど違ったんだね!!」 ——数秒間の沈黙。

「・・・和鶴、遺書を用意しておきなさい」

「殺す気!?! 僕を殺す気なの!?!」

この人、本当は僕のお爺ちゃんじゃないんじゃないだろうか。

「それで富士の樹海と日本海どっちがいいのじゃ?」 しかも、明らかに自殺に見せ掛けるつもりだよ!!

っていうか、今は一緒に魔法科へ行ってくれる人の話をしたはずだ。

「でも、勝手にみんなの3年間を変えちゃうのはいけないんじゃない?」

「それなら、和鶴が特に仲が良かった数人ならいいじゃろう?」

そういう問題じゃないと思うけど正直それは嬉しい提案だ。

「じゃあ、僕が事情を説明して、一緒に魔法科へ行くことを了承してくれた人だけにするよ」

そうしないと、お爺ちゃんより先に顔なじみのみんなに東京湾に沈められそうだから。

「そういうわけで、僕は教室に行くよ。一緒に魔法科へ行ってくれる人も捜さなくちゃいけな——」

「まあ、待て和鶴。魔法科仲間を捜す前にお前の書類だけでも——」

「い、急がなくちゃ時間が無くなるから!! 失礼しましたっ!!」
逃げるように学園長室を飛び出た。人の話を聞かないような人にはこうやってこっちも相手の話を聞かなければいい。

それにしても本当に危なかった・・・。。もう少しで魔法科に通わせられる現実を目の当たりにするところだった。

「さてと、そろそろ真面目に魔法科仲間を捜さなきゃいけないよね」
まずは、普通科の教室からあたってみるかな。

第1話：祖父の策略（後書き）

修正とかしてたら遅くなっちゃった、ゴメンね。

・・・

・すいません。調子にのってました。

ま

あ、駄文なわけですがそれでも楽しんでいただけたら幸いです。

第2話：和嶋の交渉（前書き）

前話とは少し書き方などを変えてみたので読みやすくなったかもしれませんが。でも、それは読みにくくなったかもしれないということです。．．．．．なんかプレッシャーが尋常でないんですけど。

第2話：和鵠の交渉

「お邪魔しまゝす、っと」 普通科の校舎に元気よく入った僕は、廊下に人がいるのを確認してから魔法科仲間を捜すことにした。

「さて、あの5人はどこにしているかな？」

必死に脳内会議を繰り返した結果、魔法科仲間の候補をなんとか5人まで絞れたのだ。

その5人の中にはひとりだけ先輩がいるので、後で二年生の教室に行かなくちゃいけない。

「なにはともあれ、4人を捜さなきゃ——って、なんで一年生の教室前に先輩がいるんだ？」

候補に入ってる雪峰静《ゆきみねしずか》先輩がなぜか教室前でうろうろしていた。

放っておくと後でなにか言われそうな気がするので声を掛ける。

「おーい、雪峰先輩？」

「……………この声は和鵠？」

こつちを振り向くと腰まである長い髪が流れるように雪峰先輩の首の動きについていく。

雪峰先輩はとても整った顔立ちだろうけど、鼻から上が前髪で隠れていて本当のところ誰も雪峰先輩の素顔を見たことが無いらしい。閉じた口からは長い八重歯が覗いていて、物静かな所と相成って猫のようなイメージを相手に与えさせる。

「……………和鵠、久し振りね」

「そうですね。よく考えたら、結構久し振りだったんですね」
時の流れて速いものだなあ、としみじみ思う。

「そういえば、雪峰先輩はこんな所で何をしていたんですか？」

「……………和鵠を捜してたの」

「僕、ですか？ それならちょうどいいや。僕からもお話というかお願いがあるんで」

「・・・・・・・・・・お願い？」

「はい。実は――」

――事情説明中――

「魔法科・・・・・・・・」

「雪峰先輩、やっぱりダメですか？　そうですね、一年間普通科で勉強してたんですもんね」

そう言った僕に対して雪峰先輩はこう問い掛けてきた。

「・・・・・・・・それは置いといてなんで私に・・・・・・・・？」

これは下手な答え方をすると、告白と間違えられるぞ！！

細心の注意を払いながら頭をフル回転させる。

――よしっ、これなら大丈夫だ！！

「雪峰先輩は中等部の頃に仲良くしてもらいましたし、それに・・

」

「・・・・・・・・・・それに？」　今回の説得のポイントはここからにあると言ってもいい。それぐらい次のセリフは重要なのだ。

僕は思いついた何個かのセリフをわかりやすくまとめて、噛まないうように声をだした。

「それに・・・・・・・・どうせ勉強するなら、やっぱり好きな人と一緒に勉強したいですしね」

「・・・・・・・・・・和鶴。いきなりそんな告白みたいなこと言われても困る・・・・・・・・」

なぜか雪峰先輩は顔を真っ赤にして俯きながら、そう言ってきた。なんか顔が赤すぎて茹でたカニみたいだなあ。

・・・・・・・・・・ってあれ？　今、僕、告白みたいなこと言ってなかった？

いや、今僕は確実に告白してた！！　マ、マズイ！！　なんとか誤解を晴らさないと！！

「ち、違っ・・・！！　そういう意味じゃなくて、一緒にいて落ち着く人って意味です雪峰先輩！！」

「・・・どっちにしろ嬉しいから困る・・・」

「うわああああっ！！もう一体どうしたらいいんだ！？　　」　　どんどん悪い方向に向かつてる気がする。

こうなったら、話をずらすしかない！！

「そっ、そんなことより、魔法科と一緒に編入してくれるんですか！？　　」　　してくれないんですか！？

「・・・和鶴がいるなら別にいい」

「そうですね、そうですね。ダメですよーってええっ、いいんですか！？　　」　　予想外のオーケーに本当にビックリした。っていうか、僕がいるならとかいうのが理由って、そんなに簡単に決めてしまっていていいんだろうか。

「ありがとうございます雪峰先輩！！」

「・・・お礼なんて別にいい」

ほかならぬ和鶴の頼みだから、と雪峰先輩は付け加えた。僕は意外にも雪峰先輩に好かれているのだろうか？

「じゃあ、始業式が終わった後に家に来て下さい」

「和鶴の家に！？」

「は、はい。用事が無かったらでいいですけどー」

「よろこんで行かせてもらおうわ！！」

ど、どうしたんだろう。いつもは名前通りに静かな雪峰先輩がなぜか興奮しているように見える。返事もすごく速いし。

まあ、オーケーしてくれたんだからいいか。

「あ、僕はあと4人を捜さなきゃいけないんでそろそろ行きます」

「・・・あと4人？」

あ、元に戻った。っていうかさっきの説明の中で言ってなかったっけ？　忘れてたのかな？

「ええとですね、さすがにひとりだけだとさみしいですから5人ぐらいかなと思ってるんですよ」

「……………それでその4人も家に呼ぶの……………」

「呼びますけど、どうかしたんですか？」

「……………別になんでもない」

あれ？ 雪峰先輩、なんか怒ってない？ よく見ればその頬も膨

らんでるように見えるし。

「あ、あの、雪峰先輩？」

「……………それじゃ、和鶴の家で集合ね」

ぷいっと顔を背けて雪峰先輩が去っていく。

興奮したり、怒ったり、さっきの雪峰先輩は表情が豊かだったな
あ」

そんなことを言いながら教室に入っていくと、見知った顔を見つけた。候補にも入っている奴だ。

「ねえ、忍。なにやってんの？」

「ちよつとな、新しい発明品でも作ってみようと思ってたんだ」

そこには、魔法科＋超能力科のため、あの4本の柱造った偉大なる父を持つ篠崎忍《しのぎきのぶ》がいた。

髪型は特筆すべき所があまり無い、少し長めの普通の髪型。顔はなかなか良いと思うけど、性格というかその発明品というかがすごく問題なので、あまり女子にモテたことはない。こいつと幼なじみの僕が言うんだから間違いない。

ところで、新しい発明品って、なんだろう？ ちよつと気になるから聞いてみよう。

「で、今回は何を作ってるの？ それ、普通のカメラみたいに見えるけど」

よくぞ聞いてくれた、と言いながら忍がそのカメラらしき物を僕に見せ付けてきた。

「聞いて驚くなよ？ このカメラは——」

ゴクッ

一体どんな発明品だというのだろうか。忍が間をたっぷりと空けるから僕はとつても気にな——

「このカメラは撮った被写体が全裸で全裸で写るというスグレモノだ」

——りすぎて頭がおかしくなりそうだ。

「っていうか、それっておもいきり違法だよな？」

「この俺がそんなものを恐れるとでも思ったか？」

な、なんだ！？ 明らかに犯罪者の言葉なのにとっても神々しい！！

「で、そのお値段はっ！？」 これは今すぐにでも買い求めなければ！！

「今回は少しお安くして、税込みでなんとっ！！」

「なんとっ！？」

財布の紐をこれでもかというぐらい、握りしめる。

「——10万円でのご提供です！！」

「それはそれは……」

ピポパ プルルル

僕はポケットから携帯電話を取り出して110番をプッシュした。早くこの違法カメラを明らかにぼったくりな値段で売り付けようとしている不埒な輩を警察に通報しなきゃ！！

「まっ、待て和鶴！！ わかった。わかったからその携帯電話を渡せ！！」

「イヤだ。・・・まあ、カメラの値段を大幅に下げてくれたら考えてやってもいいけど？」

「・・・しかたない。カメラの値段を下げてやろう。くそっ、開発費もバカにならないというのに!!」

「誰がバカだってこの変態野郎っ!!」

「お前のことはバカにしてないぞ!？」

えっ!？ 違ったの!？ てっきり僕のことだと思ってのに!!

熱心に(?) 忍と値段の交渉をしていると突然後ろから声が掛けられた。

「和鵠に忍、面白そうな話をしているじゃないか」

「お前は・・・なんだ、透じゃないか」

「なんだとはなんだ」

声を掛けてきたのは僕より背の高い上塚透《かみづかとおる》だ。こいつは中等部でクラス替えの時に僕と出会う前はその名前を口にするだけで不良が逃げ出すほどにケンカが強かったらしい。まあ結果的に言うと、すごく荒れていたわけだ。

それがなぜか、僕と同じクラスになって、僕とよく話すようになってからというもののケンカをしたという噂をあまり聞かなくなった。実はその理由は僕も知らないのです、また今度聞いてみることにしよう。

「で、そのカメラがどうかしたのか？」 「そうなんだよ、透」

「聞いて驚くなよ？ このカメラは・・・」

「被写体が全裸で写るんだ!!」

綺麗にハモった僕と忍の声に透の目がこれでもかというぐらい見開かれる。

「そっ、それは本当の話なのか!？」

「本当だ」

「で、気になるそのお値段はっ!？」

うんうん、男として正しい反応だ。でも、それを聞いてしまうとすごく後悔することになるのに。

「今回は10万円でのご提供です!!」「……………拳と足、どっちがいい?」

訂正。どうやら、後悔しなければならないのは忍のようだ。

「よく考えたら、なんでこんな物を売っているんだ?自分だけで楽しんだらいいじゃないか」

「あ、確かにそうだね。なんで自分だけで楽しまないの、忍?」
僕なら絶対にそうしてるのに。

「そんなことをすれば、俺が大量出血で死んでしまうじゃないか」
そうか、鼻血が止まらなくなるのか。納得だ。

そんなこんなで透と一緒に値段の交渉をしているとまたまた声が掛けられた。僕って人気者?

「おい、和鶴くん!!」 おや? 今度は廊下から声がする。
っていうかこの声の持ち主は今、保健室でグッスリ寝てるはずなんだけど。

廊下に出て、声のする方へ顔を向けてみる。見えたのは手を振りながらこちらへ走ってくる人影。

「そんなに走ったら転んじゃ——あっ」
そしてその人影は——

ズシャアアアアッ!!

——見事に転んだ。

「うわぁ……………なんかものすごく既視感を感じる」
今朝、転んで擦りむいた所が少し痛んだ。

「痛たたた。転んじやつたよ、あはは」

ものすごく派手に転んだ真泉さんは元気よく笑っていた。タフな娘だなぁ。

「大丈夫？ 真泉さん。」

「あ、うん。だいじょーぶだいじょーぶ。」

「それならいいんだけど」 本当にタフな娘だ。

「そういえばありがとう」

「え？ 僕、なにかしたっけ？」

「職員室まで運んでくれたんでしょ？」

「ああ、今朝の話か。別にお礼なんかいいのに」

「いやいや、そんなの悪いよ。それで、そのお礼なんだけど、食べられるものがないかなと思って、」

ちょうど小腹も空いているしナイスタイミングだ、真泉さ——
「カラシたっぷりのシュークリームと、ワサビたっぷりのシュークリームを用意してみましたっ」

「……真泉さん、君は僕を殺すつもりなのかい？」

「どっちがいい？ ねえ、どっちがいい？」

頼むからそんな期待に満ちた顔をしないで、真泉さん。この二択はどっちを取っても僕がのたうちまわることになるから。

こんな時には僕の頭の中で繰り広げられる脳内会議に任せるしかない——！

超高速とも言えるスピードで頭が回り始める。

そして、僕の脳内会議はひとつの回答を出した。

『二択だから迷うんだ。選択肢をひとつにしろ』

カラシたっぷりのシュークリーム。ワサビたっぷりのシュークリーム。どちらを取っても地獄に堕ちるというならば——

「僕は僕に忠実に生きる——！」

ふたつの地獄行きのチケットを一気に口の中へ放り込む。

「えっ！？ ちょっと和鵜くん！？」

ふふっ。さすがの真泉さんもこの行動には驚きの色を隠せないみたいだ。

こうやって、ふたつ一気に食べてしまえば互いの辛さが衝突し合
って辛さが消えるはず——

ボタン——!

「か、和鶴くん!!　だ、大丈夫!？」

——もなく、むしろ複雑に絡まり合って倍増したあまりの辛さに
結局僕は倒れてしまった。

余談だけど、カラシとワサビたっぷりのシュークリームは凶器に
等しい味がした。



「う、うーん……。ここはどこだ……。?」

目を覚ますと、僕は保健室のベッドに寝かされていることに気が
ついた。

「ふう、なんとか意識は戻ったぞ」

透が交差させて僕の胸の上に置いていた手をどける姿が目に入っ
た。

……。心臓マッサージ!?　違うよね!?　僕は生死の境
をさ迷ってなんかなかったよね!?

「和鶴くんおはよう。大丈夫?」

男にしては少し高くてそれでいて女にしては少し低い、この声は・

・

「やあ、みつ……。き……。?」

「どうしたの?」

「み、海い月いいいっ」

「えっ!?　ちよっ、なにをす——うわあっ」

ベッドから飛び出て僕が抱き着くとビククリしたような声をあげ
るこの美少女の名前は愛河海月《あいかわみつき》といって、誰も
が認める美少女だけど、どうやら戸籍上は男となっているらしい。

僕はこれっぽっちも信じちゃいないけどね。

そんな美少女もどきが、いつもは首の下辺りまで垂らした男にしては少し長めな髪をツインテールにして現れたのだから、僕の理性など微塵のかけらも残ることもなく吹き飛ばされてしまうのはわかってもらえると思う。なんというか、もいど真ん中ストライクなわけだ。

「ちよっ、やめてってば!! ホラ、皆も見てるしまだ明るいし!!」
「愛河、その拒み方は余計に和鶴を興奮させるからやめたほうがいいぞ」

透の声がするけど今は透なんて気にしている場合じゃない。

「そ、そんなはずは——　　ってうわあっ!?!　　和鶴くんが制服の上着を脱ぎ始めたあ!!」

誘ってるよね!?!　これって誘ってるんだよね!?!

「和鶴くん!　僕らふたりとも男の子だよ!?!　だから……………ね?」

「……………海月ならいいや」

「なんでそうなるの?!?!」

「スマン。さっきの上目使いは、正直俺もグラツときた」

「そんな、透くんまで!!」

「そのお詫びといっちゃあなんだが助けてやる。おい和鶴、そのへんでやめとけ(ボゴッ)」

「ハアハア、海月!　ハアハア、海つ——ぐはあっ!!……………はっ!!　僕は一体なにを……………!?!」

「よかった……………正気に戻ってくれたんだね」

涙目の上に上目使いの状態で僕を見上げてくる海月を見ると、なぜだか罪悪感がものすごくする。とりあえず謝ってみよう。

「大丈夫、海月?　ゴメンね、僕がなんかしちゃったみたいで」

「えっ!?!　なにも覚えてないの!?!　……………ちよっただけ嬉しかったのに……………ボソボソ」

「え?　よく聞こえなかったから最後の所、もう一回言ってくれる

？」

「それは俺も気になるな」 やっぱりこれは透も気になるらしい。

「べ、べつになんでもないよっ！？」

それにしても目の泳ぎ方が尋常じゃない気がするんだけど。

「ほう、愛河にはそういう趣味があったのか」

「透くんはやっぱり聞こえてたんじゃないかぁ！！」

「え？ 海月にどんな趣味があるって？」

「だからなんでもないってば！！」

むう、気になる。まあ、いつか。海月に会えたんだし。

「おっす、元気か？」

「和鶴くん、ゴメンね。大丈夫？」

「・・・・・・和鶴、大丈夫？」

「おや？ 真泉さんに忍に雪峰先輩までいる。ということは・・・・・・
・ 一つの間にか魔法科仲間の候補が全員集合しているじゃないか。
ちようどいいや、雪峰先輩には二度目になるけど、皆に交渉してみよう。」

「皆、実は話があるんだけど。雪峰先輩は二度目になっちゃうんですけど、まあ聞き流してください」

「・・・・・・わかったわ」

——事情説明中——

「——というわけなんだけど・・・・皆どう？」

皆に訪れるしばしの沈黙。

「私はいいよ」

まず、そう言ったのは真泉さんである。

「いいの！？ ありがとう、助かるよ！！」

「俺もいいぞ」

「ありがとう忍！！ 君が居てくれると色々と助かるんだよ！！」
主にその類い稀なる変態なセンスにより生み出される発明品が。

「僕も・・・いいかな」

「本当に!?! 君と居るとなんだか元気になれる気がするんだよ!」

「・・・なんかちょっと嬉しいな」

主にそうやって照れてる顔もまたカワイイ所とその性格に。

「俺も構わんが・・・」

「ありがとう!! 君と居ると――」

「ただし、条件がある」

――そのただでは了承しない所がとても腹立たしいんだよ。

「で、条件ってなにさ」

僕がつまらなさそうに聞くと、透はなぜか自慢げな顔をしてこう言った。

「なんでも、魔法科では一学期の最初に受けるテストの点数で初期魔力値とやらを決めるそうじゃないか。そこで俺の条件は、そのテストを受けずに初期魔力値をこっちの要望通りにしてもらいたい。そうだな、控え目にして中の上で許してやろう」

「・・・どんな条件を出してくるのかと思えば・・・」

「・・・セコっ!!」

「黙れ!! いつもテストで10点以上を取ることの出来ないお前に言われたくないわっ!!」

「ふざけるなっ!! ギリギリ10点は取れるっ!!」

人をバカにするんじゃない!!

「・・・冗談で言ったつもりだったんだが、まさか本当にその程度だったとは・・・」

「くそっハメられた!!」

透がまさか、こんな頭脳戦まで出来るとは・・・!!

「いや、ハメられたもクソもないだろう。お前、やっぱりバカなんだな」

「うう・・・、わかったよ、その条件をのめばいいんだろ!?!」
「それでいい。それで」

ニタニタ笑っている顔がまた、とても腹立つ。いつか絶対に復讐してやる……！！

でも、これで魔法科仲間ができたわけだ。一応お礼を言っておきなきゃ。

「透以外の皆、本当にありがとう」

仇敵を除く皆に満面の笑みでそう言っていると、忍もちろん透を除いた全員が顔を赤くして俯いてしまった。なんだろう、誰が一番早く顔を赤く出来るか競い合っているのだろうか？

とにかく、それぐらいに女性陣の顔は赤かった。

「それじゃまた僕の家で」　そう言って保健室から出ようとして、大事な事を忘れていることに気がつく。　危ない危ない、これだけは言っておかなくちゃ。

「そうだ、透」

「ん？　なんだ和鵬」

「これから暗い道を歩く時は気をつけてね？」

僕は青く染まっていく透の顔を見ながら、今度こそ保健室を出た。

第2話：和鶴の交渉（後書き）

と、いうわけで今回も駄文なわけですが、お楽しみ頂けたでしょうか？ っていうかこんな後書きまでよんでくれる人はいるのか！？ 少々不安ですが、そんなことでめげている僕ではないのです！！ 第3話の執筆も頑張らねばなりませんね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9896f/>

僕を取り巻く女難の相

2010年12月31日05時02分発行